

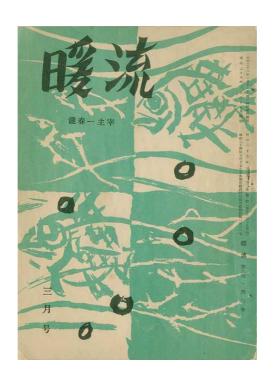
俳句・評文集 ○ 百日紅

句集

百日紅

装丁 佐藤喜孝

昭和二十年代



冬 耕 0) 竹 根 3 つ き る 皆 白

発止々々と、鋭い鍬先が、大地へ食ひ込む。これから開墾する土地なので、土の中には竹の根などが未だはびこっと眼に入ってくる。霜に荒れた寒土の下にも清浄な生命が通ってゐたのであ下にも清浄な生命が通ってゐたのであ

昭和28年

ゐる。

晚 禱 の首に巻ける は父のもの

寒い冬の夕の祈りである。神の前に膝まづきながらも、汚れた衿巻を首には父から貰ったものである。取へて除らなかったのは父の愛情に甘へた気持らなかったのは父の愛情に甘へた気持ちであり、すべてを許す神の愛を信じちであり、すべてを許す神の愛を信じちであり、すべてを許す神の愛を信じちであり、すべてを許す神の愛を信じちであり、すべてを許す神の愛を信じちである。「首に巻けるは父のせの」心憎いまでに含みの夛い表現をしてゐる。

昭和28年

蜂飛べり忍苦の足をぶらさげて

敵の目に追はれながら生きるため

に働かねばならぬ小動物に作者は憐み

うにぶらさげてゐる様子を「忍苦の足」をかけてゐる。長い足を邪魔もののや

と云ったのは作者の機智であり巧みな

表現でもある。

やはり病者の感覚といふものであら

う。

昭和28年

飯も水も絶たれ木犀の香の旨し

強烈な働きがいきいきと表現されてゐ手術のための絶食であらう。嗅覚の

る。



)

陳情の明日へハンカチ白くた、む

ら、矢張り今月の光陰集に多数の座り込みで抗議し、遂に一人の死亡者まで出したといふ悲惨な事実は吾々の心を出したといふ悲惨な事実は吾々の心を強したといふ悲惨な事実は吾々の心をがいる。

ある。 ち着いた心構えがはっきり分かるので ち着いた心構えがはっきり分かるので と落

込み陳情の句があった。

片陰やわ れらは 持 た ぬ 労 働 歌

養者の哀しき境遇が語られてゐる。の句には工場労働者のストと違ふ療



昭和三十年代



藁 屋 根 に 梅の香をのせ村は保守

梅花の中に沈む藁屋根を逆に「藁屋

も、作者が単なる自然鑑賞に満足して根に梅の香をのせ」と敍したところに

ゐないことが分る。

安住し現在の政治に対して全然抵抗をこの村人達は先祖伝来の土地家屋に

保守」と遣る方なき忿満を洩らしてゐ

感じてゐないのである。作者は「村は

る。

昭和30年

かつぎや」の手足短き暖房 車

る。 されてゐる。それから、このやうな人 でが絶えず格闘をつべけねばならない されてゐる。それから、このやうな人 されてゐる。それから、このやうな人 でがある。「か が絶えず格闘をつべけねばならない。 この句も作者は何も云ってゐない。

ることを附け加へるであろう。
有季絶対論者であれば「暖房車」であがこの俳句によく感じられる。日本のがこの俳句によく感じられる。日本の西欧の象徴のそれとは異ふということ

朧 夜 (I) 瀬 音にかすかなる腐 臭

は未だ幸福と云はなければならない。に包まれてゐる仄かなる幸福感である。療養の身であるとしても、愛情というもの「腐臭」は人間臭である。人間

緑蔭の硬き木の根に身を置け り

る。単なる憩ひではなく、何かにすが これは弱き肉体を持つ人の憩ひであ

らうとする人の心持ちである。私は嘗

て、若楓の幹に金鉄の硬さを感じたと いふ句を作ったことがあるが、それも

感ずる。

私の病後の時であった。 硬き木の根であることに瑞々しさを

青き踏むみんな身ぬちのどこか欠け

でである。 遊びの人に冷たい批判の眼を向けてゐ がは青き踏む人自身ではない。野



昭和31年

薔薇など剪る義手の袖口ゆたかにす

が、此の句が一番深いものを持ってい 義手義足の不幸な人達を詠んでいる

る。「薔薇など剪る義手」はそれほど

不幸でもなさそうに一応見える。「袖

口ゆたかにす」がその感じを表現して

な運命を知りつつ、もっと不幸な人へ いない。だが腹の底では、自分の不幸 いる。作者は月並みな同情を寄せては

愛燐の眼差しを向けているのである。

昭和31年

雷迫り修 理 時計のいきいき覚む

セットで一つ一つ摘まみ上げて丹念に分解した細かい器械の部分をピン

組立ててゆく。

近づいて来る。突如頭上に迫る激しい遠いところで鳴ってゐた雷は次第に

秒針が動きはじめた。

とどろきに目覚めたやうに、文字盤の

あった。
「いきいき覚む」と正しい鼓動をう

日限りの仕事が蜘蛛に負けてゐる

日限仕事を一生懸命にやってゐる。

私の想像では時計修理のやうな仕事だ

と思ふ。

速で手際がいい。なかなか捗らぬ自分る。人間の仕事よりも蜘蛛の仕事は迅夕の軒端に蜘蛛が巣をつくってゐ

に見惚れてゐるのである。

の仕事に焦燥を感じながら蜘蛛の営み

昭和31年

鷺たちし樹々をしぐれが洗ひ出す

方へ帰る。何万羽と巣喰う鷺のために、 方へ帰る。何万羽と巣喰う鷺のために、 樹々は立枯れ、彼らの糞にまみれてい る。ただ不精者の鷺だけが残って冬を 越す。やがて秋が深くなり、折々の時 雨が鷺の立ち去った後の樹々の汚れを 際行した埼玉の美園村にある鷺山の風 景である。風景を描くと共に鷺の生態 が語られている。

昭和35年

煮こごり買ふ土地の一角買ふ如く

「煮こごり」は冬の喰べものとして「煮こごり」は冬の喰べものとしてたいた。 古風なものである。厳冬の夜煮た魚などを其儘台所に置くと煮汁が寒天のよい。 ように作って、冬の季節料理として売られるのである。「煮こごり」を店頭られるのである。「煮こごり」を店頭の一角買ふ如く」と大袈裟に云ったのである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つである。此頃の家や土地に関心を持つがある。 昭和四〇年代



節分の夜の泥 臭き吾が子の手

外に遊ぶ子供達の手は、いつも泥臭いものだ。母親にいくら叱られても、服やキモノを汚してしまうほど泥と一臓である。この夜の「泥臭き吾が子が、明くれば立春ということで、どこが、明くれば立春ということで、どこものである。この夜の「泥臭き吾が子の手」は親の愛情というよりも自然への憧れを持つ俳人の感傷であろう。

げんげ田に吾子を泳がせ妻の故郷

実家を訪れる。折から美しいげんげのいとし子を連れて、久し振りに妻の

花に溢れた田圃で子供を遊ばせる。「吾

い感触と、父親の愛情まであますとこんげ田の毛せんを敷きつめたような快子を泳がせ」は実に見事な表現で、げ

ろなく表現し得ている。

昭和41年

夕長し青田の鷺の神妙

に

る。

私はときどき東京の町中の空を鷺のの日が傾きかけた頃である。遠い埼玉の鷺山あたりから朝早くとび出して玉の鷺山あたりから朝早くとび出して玉の鷺山あたりから朝早くとび出して水はである。

月並ではない。 青田に鷺のいる風景なんかあまりに 青田に鷺のいる風景なんかあまりに 青田に鷺のいる風景なんかあまりに

ヨットハーバー灼くる棒切れ林立する

景は空虚だ。灼熱の日が海の上にある帆のない帆柱だけが林立している風

ときほど余計に感じられる。「棒切れ景は名はた。火素の日だ潅の山にある

「たつきの海へ続く石段蛍草」も的確林立」は巧く云い得ている。他の句で

く石段」は、凡庸な作者には云えるもる。簡単なようだが「たつきの海へ続な、所謂根源を把かんだ云い廻しであ

のではない。

昭和41年

足長蜂熟れ柿の香りに溺れゐて

長い足をもてあましているように、ためらっている。熟れ過ぎた柿の酒のためらっている。熟れ過ぎた柿の酒のためらっている。熟れ過ぎた柿の酒のようなかおりに、蜂はすっかり好い気ようなかおりに、蜂はすっかり好い気もちになっているらしい。

老眼鏡も身ぬちのものとなりて冬

いつしか老眼鏡を必要とする齢にいつしか老眼鏡が生きてくるわけであれば、重宝だから離れだけ家に居て本を読んだり、物を書れだけ家に居て本を読んだり、物を書れだけ家に居て本を読んだり、物を書くような人間には悪い季節ではない。そして、老眼鏡が生きてくるわけである。

昭和42年

紅 葉 酒 仏の 山へ注ぎこ ぼ す

林間紅葉を焚いて酒を燗たむるわけだが、行道山の紅葉酒は、竹筒に入れてあたためるのが秘法である。それに、霊薬が入るらしく、香りと味が素晴らしく、忽ち陶然となるのである。作者は、今年はじめて行道山に上り、句友とこの霊酒を酌み交わし、いささか酔って、注ぎこぼしたのであるが、か酔って、注ぎこぼしたのであるがである。

冬暖の水をくぐりし手 打蕎 麦

冬は寒気のきびしい方が自然であって、米作其他の収穫にも暖冬異変は好い影響を与えないと云うが、私には冬の暖かいことはやはり有難いと思う。の暖かいことはやはり有難いと思う。でであるうが、冬も暖かく感じたのは、自めを歓待してくれる人間の情であったで違いない。

川 麦の果てに雲湧く父の匂ひ

先頃尊父を亡なわれたこの作品の悲 にみの句(喜びの句も同じだが)は、 である。作品として人に見せようとす である。作品として人に見せようとす るならば、表現としての芸術的苦労を である。作品として人に見せようとす くを恋い泣く作者の悲傷が読む者の心 と比較すれば、よりの表現というもの と比較すれば、からない。この句の亡き がどんなものかよく分かると思う。

天道 虫身 をあからめて冬日 に

小春日和の野に残っている小さな生 命である。春や夏と違う澄み徹った冬 日に作者はじっと眼を凝らしている。 まの飛翔である。それを「あからめて」 と云った。 自然凝視の句の尊さは、ものの生命 を見つけることである。色のない冬枯 を見つけることである。

な生命である。

昭和43年

翔 つ 狂 院 を 囲 む麦 生の 熱い 息

な環境に建てられている。 大抵騒がしい世間から隔離されたよう 脳病院と云われる精神科の病院は、

其の狂院を取り巻いているのは麦畑思われる。 を使ったのは、斎藤茂吉からのように云ったが「狂院」という文学的な言葉

のような精神病者と対照させている。力を「熱い息」と表現して、生ける屍萌え、雪の底でも冬を越す。其の生命である。麦はきびしい寒さの中で青々

ふる さ と 0) 琥 珀 0) 色の 寒 蜆

昭和46年

田 楽 B 老 た る 母 0) 骨 太

が自分のために田楽をご馳走してくれたまたま故郷に帰ると、老いたる母

る。

ばきに見惚れるのであった。活に鍛えられた骨太の母の慣れた手さな味噌が塗りつけられる。長い百姓生な味噌が塗りつけられる。長い百姓生され、山椒の香のぷんぷんする真っ青

技巧に感服した。 頑丈な母の手に依って感じさせる表現豆腐を刺した青竹の串の美しさをも 昭和五〇年代



川幅をへだててもらひまつりかな

日本の古い美しい人情がしみじみと感じられる。「もらひまつり」という言葉が生きているのである。「川幅」という言葉も、この川が相当大きく、豊かな流れであることを語っている。川は村の境或いは県の境ともなっているし、こちら側はおまつりの神様の氏子ではないのだが、おまつりの神様の氏入れてもらって、軒に注連を張り祭提りなどを吊るしているのである。作者の住む北葛幸手あたり、利根川か荒川の住む北葛幸手あたり、利根川か荒川の住む北葛幸手あたり、利根川か荒川

べりの風景が鮮やかに描かれている。

青田風ちらりと青き穂の見えて

「青田風」は、白く乾いた、炎日にだらぎら光る道が想像され、青々と展けた稲田をわたる風の涼しさを表現した季語になっている。大抵の句は其の季語と其他の事物の配合に依って成立つのであるが、この句は、飽迄青田立つのであるが、この句は、飽迄青田立つのであるが、この句は、飽迄青田ががりを見せる。自然のいのちと、それを培った人間のよろこびが端的にいれを培った人間のよろこびが端的にいたがりを見せる。自然のいのちと、それを培った人間のよろこびが端的にいたがりを見せる。自然のいのちと、それを培った人間のよろこびが端的にいた。

銃 眼 0) 真 下 に 群 れて 葉 鶏 頭

前書がつくところだがなくても解 る。古城などに登って、其の銃眼から る。古城などに登って、其の銃眼から を焰の色に染めている。「真下に」が を焰の色に染めている。「真下に」が そびえ立つ城郭の感じをよく出してい る。他の句もそれぞれに手堅く、俳句 る。他の句もそれぞれに手堅くと出している。

昭和50年

たまねぎと女体の密度蟬うまる

格調のしっかりした正統的な表現の作者も、内容に依っては、このような象徴的な句を作るものかとる。よしゆき氏の「蟬」と題する作品を詠んだものである。よしゆき氏の「蟬」と題する作品を詠んだものでる。頭は人間でなく、青白い肌の玉葱になっている。る。頭は人間でなく、青白い肌の玉葱になっている。る。頭は人間でなく、青白い肌の玉葱になっている。るところですね」と云ったそうである。たまねぎのるところですね」と云ったそうである。たまねぎのるところですね」と云ったそうであるとのであるが、と思う。

よしゆき氏の画を俳句に詠んだ冒険を私は買う。

昭和50年

めまとひのひとつ眼鏡の内側へ

では夏だが、春から秋まで水辺に見らては夏だが、春から秋まで水辺に見られ、蚊柱のように群がっている。作者の歩いてゆく道を塞いでいるのを、かまわず顔をぶつけて通ると視線を黒くまわず顔をぶつけて通ると視線を黒くなが眼鏡の内側に入って邪魔しているのであった。自然に任せている作者ののであった。自然に任せている作者ののであった。自然に任せている作者ののであった。自然に任せている作者のであった。自然に任せている作者のであった。自然に任せている作者ののであった。自然に任せている作者ののであった。自然に任せている作者ののであった。自然に任せている作者ののであった。自然に任せている作者の

あ たらし き麺ぶち板や妻の冬

「麺ぶち板」は、そばやうどんを打っための板だが、「ぶち」という北関東らしい荒い方言の味を出しているところが面白い。働き者の細君が、新しい板に変えて、冬に備えている意気込め、子供のため、美味しいうどんの煮め、子供のため、美味しいうどんの煮る。

昭和51年

閘 門 に 鍵 0) か かりて三ヶ

間門のある風景は水郷ならよく見られる。この句は、作者の家から近いれる。この句は、作者の家から近い公園になっている景色が想像される。正月が建っている景色が想像される。正月の松飾などはなく、鍵一つがこの句のの松飾などはなく、鍵一つがこの句のがはっている景色が想像される。正月の松飾などはなく、鍵一つがこの句のが違っている景色が想像される。

昭和51年

また家を追はるる気配寒の明け 種

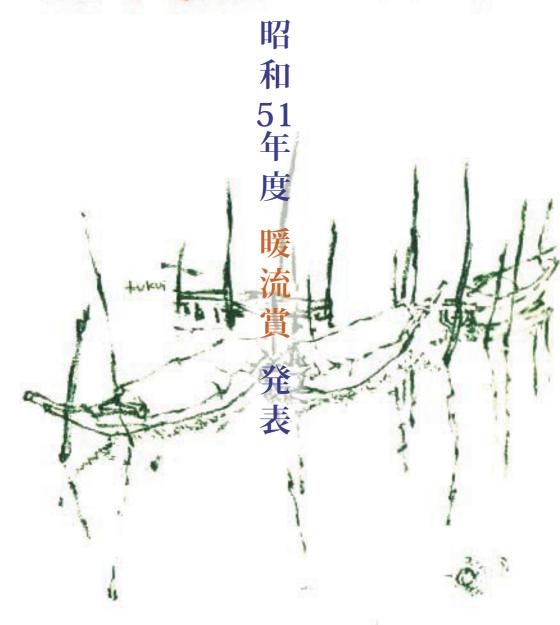
素朴な写生の表現手法に、澄徹した作家の凝視を感じるような作品を見せてきた作者にこの句は珍しい。境遇の上に何か変化が起ったのだと察しられる。過去に家を追われるような気配を感じたのである。それ以上句の表からは何たのである。それ以上句の表からは何あるに違いない。併し、この句も下五あるに違いない。併し、この句も下五の季語がちょっぴり作者の明るい希望をうち開けている。

蒔きを了へし夕日にあたたまる

新を蒔くことになっている。はじめから田圃に種を蒔く作り方もあると云うが、兎に角稲作の最初の仕事である。だから肌寒い日もある。農仕事はよくだから肌寒い日もある。農仕事はよく知らないが、草花の種などを蒔くの頃だから肌寒い日もある。農仕事はよくから頂了ったのであろう。「夕日にあたたまる」が早春情景として、写実派らしく手固い描写になっている。

暖流

'76 3



———瀧春一主宰推薦——

 \prod

幅

を

だ

7

ても

ら

V

ま

つ

り

か

な

遠 祭 地 瓜 0) 0) 巻 笛 ほ 手 に 止 7 は 流 り み 使 貌 る 7 ひ に る 涼 う 古 利 つして し 根 0) き B 稲 大 深 初 架 根 夜 胡 0) 蒔 業 < 脚 瓜

深

夜

業

頸

0)

羽

蟻

を

払

ひ

7

は

薄 た 灯 銃 新 小 朝 青 改 才 まねぎと女体 豆 荷 IJ 田 良 眼 涼 焼 親 島 風] 田 0) 0) B 0) き ち 畦 ブ 花 真 床 <u>Fi.</u> 華 り 5 芝 粛 匂 下 燭 ぎ り 色 板 ŧ 夏 Z に り と を V 潮 厚 0) 青 0) す 知 群 白 と き 海 密 ら み き 十 三 れ < こ 度 ぬ 穂 な 武 0) 7 照 ま 歯 蟬 夫 0) 家 小 夜 葉 り Þ う 婦 切 見 豆 屋 0) 鶏 返 か ょ ま え に 敷 島 月 る 7 す 頭 L 7 に

光陰 賞推 薦のこと ば

瀧

春

今回の受賞者は、金井充氏、柳井春乃さんの二人を推すことにし

長い療養所生活を経て来ている。療養者として俳句一途に生き、ひ

金井充氏は、水野北迷、中野文夫、片山桃弓の方々と同じように

えた表現だが、高性能のレンズで撮った画面のように極めて鮮明 たすらな俳句鍛練は、いつしか優れた俳句作家の技倆を身につけて しまうのである。 充氏は純粋な写生派である。其の作品は表面地味で、感動を抑さ

である。そうかと云って、冷たく乾いたものではなく、把えた詩情

主として作者の住む関東平野北葛の穏やかな田園風景と、小豆島等 は、五十年後半の僅か四ヶ月間位のものが対象となっているのだが、 には、作者の質実な性格がほのぼのと温かく匂っている。受賞作品 の旅吟である。熊谷よしゆき氏画展の二つの幻想的な作品を見事に

| 『早帰りにしよ、爰氏でよりかにハム に残りてたでは描写しているのに頭が下がる。

城下町のような情趣を醸し出す粘っこい作家である。東京に住んで 柳井春乃さんは、暖流では割合に少ないムード派の女流である。 その句風は都会的な淡泊な味ではなく、どちらかと云えば、古い

を持っているし、この作家の俳句用語は、大抵やさしげな話し言葉 である。それも浄瑠璃本の中にあるような古臭い文句のように思わ

いると聞くと、成る程と肯かれる。作品の一つ一つは物語的な要素

いるが、ふるさとは会津若松で、母堂は健在で、ときどき帰省して

れるが、案外いきいきした現代的な味を出している。 また、この作家は、独自の言葉遣いを創出している。例えば、「雪

小道」「早寝村」「石のおもざし」「散る花の夕桐」等、自分で創っ た言葉を極めて自然に遣いこなしている。

今回の受賞者二人は、各々質の異う対照的な作家であると思う。

な る 蒔田に男ひとりきり

作者の住む地に近い蓮田あたりの句でなく、直接田圃に種を蒔いて、芽を出して伸びたのを間引くというやり方で、植田でなく摘田なのである。金井で、植田でなく摘田なのである。金井で、植田でなく摘田なのである。金井で、植田でなく摘田なのである。金井で、植田でなく摘田なのである。金井で、地方がよく描かれている。の前田のた田があっても、田を作る人数の少ない地方がよく描かれている。あんまりうまい米は採れそうもないような侘しさを感じる。

花びらき 田舎 · 役 場 の総 立ち に

「牧開き」などと同じような言葉である。この町の役場が待ちに待った時季花の名所があり、桜の花が咲いたときが一年中一番のかきいれなのである。させたり、屋台店も茶店も許可するし、かけ、店名入りの花見ぼんぼりを寄付かけ、店名入りの花見ぼんぼりを寄付させたり、屋台店も茶店も許可するし、すせたり、屋台店も茶店も許可するし、町のおばさん達の踊りまくる何んとか断の後援もするというサービス振りである。

が良く感じられて面白いが、問題なの ある。この句を見れば、其の俗っぽさ

どと云ったが、役場の人達だけでも口 は事もなげに山開きや海開きと同じな は「花びらき」という言葉である。私

ないのである。併し、これは作者の造 から出して云っている言葉なら文句は

語であるかも知れない。私には「総立 ちに」と共に昔ながらの言葉のように

技巧派でもある。

受取れたのである。この作者は大胆な

昭和51年

全景をとらへし水の田を植うる

てれから早苗を植えるための田圃に水が張られる。田圃を隔てた向こう側に道路があり、家並みがある。それが野東平野の所謂穀倉地帯がよく写され関東平野の所謂穀倉地帯がよく写されでいる。それだけだが、早い夜明けのである。見たままを完全に表現し得たと思うことが写生派のよろこびなのである。

子供の日誰もむかしの貌ならず

昔の五月の節句と変わらないようだが、今の子供の日であったような気がだ。昔は子供の節句と云っても、先祖た。昔は子供の日は子供中心となり、が、今の子供の日は子供中心となり、

貌ではないのである。
今も丈夫でいるけれど、誰も彼も昔のけ取れる。端午の節句に遊んだ友達はとの家に帰ったときの感慨のように受との家に帰ったときの感慨のように受

つちかへば芋の葉ばかり目につきて

との句にも、苦労が見られる。平明 どの句にも、苦労が見られる。平明 というのうまさでも考えて唾をのみこん である。もう作者は「新芋の煮ころがである。もう作者は「新芋の煮ころがである。もう作者は「新芋の煮ころがである。もう作者は「新芋の煮ころがである。もう作者は「新芋の煮ころがである。もう作者は「新芋の煮ころがである。もう作者は「新芋の煮ころがである。もう作者は「新芋の煮ころがである。でいるのであろう。

明 治 村 露 も 明 治の匂ひして

建築というものは常に時代の先端を 現すものだと云う。明治に出来た建物 明治生まれの吾々の目から消えた代表 的なもろもろの建造物がこの明治村に 生あられ遺されているのである。古き ものには深い翳影がある。それは作者 ものには深い翳影がある。それは作者 ものには深い翳影がある。それは作者

蝶蜻蛉飛んでコスモスさかりなり

「蝶」だけなら春の感覚、「蜻蛉」だけなら夏だ。蝶と蜻蛉が一緒になって飛んでいる風景に一番よく合った花と云る。この風景に一番よく合った花と云えばやはりコスモスであろう。前号にも書いたが、九州のえび野高原でコスモスの花に覆われた丘を見た。其の群ちら光る蜻蛉の翅と空の碧さを私は忘きら光る蜻蛉の翅と空の碧さを私は忘れない。大まかに明快に自然の妙趣を把らえた句である。

つきあひも家族ぐるみやのっぺ汁

昔は家族ぐるみのつきあいなんて珍しいことではない、都会でも田舎でも当り前のことだった。このような句を作るということは、作者が両隣りの人で来て今は子供も親も親類のように一で来て今は子供も親も親類のように一はが感じているのであろう。芋、大根、しか感じているのであろう。芋、大根、ドボである「のっぺ汁」が其の感じをた汁である「のっぺ汁」が其の感じをよく現している。

昭和52年

寒 風 を 纏 ひてあるく乞食獅子

初春、東京の町内を廻ってくる獅子と云われていた。今の世にも乞食獅子と云われていた。今の世にも乞食獅子が見られるのは、哀れだが一種の趣きを感じさせる。獅子頭と毛鬘の裂を身に纏って田圃道を歩く姿を、「寒風身に纏って田圃道を歩く姿を、「寒風かれるのは、京れだが一種の趣きを感じさせる。獅子頭と毛髪の裂を

暖流 77

昭和52年度

暖流賞

発表

Noriko Shiba

光陰賞……金

——瀧春一主宰推薦——

大 種 身 あ め 芋 0) 蒔 律 ま 掘 () た は を に と る 5 な づ 膝 \mathcal{O} B る む 0) 0) む ほ き 蒔 曲 ∇ か ど 麺 田 夕 と が に ぶ に 寒 日 り つ と ち 男 土 に 眼 お 板 V 0) あ 蕎 鏡 な V と Þ た 麦 0) じ ぬ り 妻 た を 内 肥 ふ き 0) ま 队 側 笊 ぐ り 冬 に る り る

声 墓 明 北 吾 ま 妻 全 色 牛 八 が だ シ 景 だ つ 蛙 + 原 陸 治 家 け ヤ を < け け 八 を 村 B に に ツ と Ł 夜 埋 0) ろ も 露 海 嫌 0) 5 ガ Z な 0) 母 め は 田 も を \sim と Щ 0) イ 0) 7 れ 植 明 明 Z L ド 牛 を 7 __ 太 つ ろ 水 り 治 ゐ 斉 B 背 < と 指 0) 0) 0) に る に 秋 呼 あ 負 揉 L 田 ア Z 匂 稲 り 0) び み 0) を マ ち ち \mathcal{O} を Ш り ほ 人 か 植 IJ 5 5 L 川 下 臭 盆 は Ç, ろ う IJ 向 7 り る 虫 踊 ス る < す す L

光陰賞推薦のことば

瀧

春

はなく、いかにも俳句的な俳句だと思わせる。俳句が俳句的だとい り金井充氏の句が一番多かった。もっとも金井氏は一年間に六回巻 頭を占めていた。 て、作品本位に一句一句見直して佳と思うものを並べてみたがやは 其の作品は天才的だとか高度の詩精神に溢れているような感じで 光陰賞を決定するのに、毎月発表される巻頭よりの順など無視し

まった理想的な姿だということである。

去年の光陰賞に推薦したときも云ったようにこの作家は、作家と

うことは平凡だということではない。五七五音の定型にぴったりは

らばならない。誰にでも分かるような、読む者の胸を温かくつつむ 味である)自分の心に把らえ得たと思ったらはじめて表現にとりか ある。物をよく見据え、見極め、確実に自然を(この自然は広い意 句というものは先ず眼でしっかりと物を見ることから出発するので ような言葉遣いが欲しい。 かる。無論言葉で表現するのだが、其の言葉は飽迄直截簡明でなけ しての濁りのない眼がいいのである。私も写生派だから云うが、俳

て句作しているのだと思う。時には旅行もするようだが、大抵は起 きらの三氏があったことを書いて置く。 光陰賞の候補としてあげた作家には、松本陽一、加藤日女、池田あ 伏のない平凡な野づらから素材を得ているようである。他に今年の 念に捕らわれず、表現語として季語を自由に駆使すべきである。こ 了ってしまうからである。歳時記に解説されているような季語の概 た自然を把らえることは出来ない。季題趣味に陥り、季節の挨拶に 通説だが、はじめからそんなことを意識しながら作っていたら生き 日本の季節感を表現していなければ俳句とは云えない」というのは んなことは、俳句作法の基本だが、金井充氏はこの基本をよく守っ それから季語に問題がある。「季語を使っても其の季語によって

逃 げ 水 0) 先 を 泳 げ り 鯉 幟

赤城山を下って、裾野を突っ走る。赤城山を下って、裾野を突っ走る。これが「逃げ水」である。折から五月のれが「逃げ水」である。折から五月の頃で、鯉幟も目に入ってくる。「先をふげり」は、逃水に対する言葉の技巧がある。

昭和52年

将門の墓筍も横曲。

で表表ではできるいと、 で表表を行うない。 利廷に謀反した悪人と教えられて来た。先頃のテレビドラマでは徹底した民主主義の領主となっている。 東京の神田明神は、江戸名所図会にも、祭神はる。東京の神田明神は、江戸名所図会にも、祭神はる。東京の神田明神は、江戸名所図会にも、祭神はる。東京の神田明神は、江戸名所図会にも、祭神はされていたに違いない。 作者は、偶々寺内の竹薮で掘り出される横曲りの されていたに違いない。 作者は、偶々寺内の竹薮で掘り出される横曲りの でき見て、権力に抗する将門の意気を感じたのである。 作者は、偶々寺内の竹薮で掘り出される横曲りの でもれていたに違いない。

ろう。軽い俳諧味の出ている句である。

田 植 機 に 蹤 < 妙 齢 0) 姿 あ り

俳句の表現に就いて一刀流と言われたのは秋桜子先生であるが、この句の「妙齢の姿」は正に一刀流の表現である。 田植機の普及と共に、早乙女の風流の姿は消えたが、田植機を操る若き夫の後に蹤く妻の働きは早苗のこばれを挿し直すためでもあろうか。明るく快き美しさに溢れている。

さきたまや夏野に浮かぶ古墳 群

「さきたま」は埼玉の古称で、さきたま古墳と言われている。私は宮崎で、たま古墳と言われている。私は宮崎で、のさきたま古墳群は東都原の方に似てのさきたま古墳群は東都原の方に似ている。関東の穀倉帯と言われている。だくほど青々とした炎を上げている。だくほど青々とした炎を上げている。だくほど青々とした炎を上げている。だが、この句は青田に限定せず、夏野にが、この句は青田に限定せず、夏野にが、この句は青田に限定せず、夏野にが、この句は青田に限定せず、夏野にが、この句は青田に限定せず、夏野にが、この句は青田に限定せず、夏野にが、この句は青田に限定せず、夏野にある。

夕 焼 B 真 鯉 は 陰 0) 魚とし 7

昔は緋鯉と真鯉だけだったが、今は の色彩を持つ鯉の中に本来の真鯉がいる。本当に鯉らしい美しさと強さを 持っているのは真鯉なのだ。いつも陰 があって静かに生きている。一と時の のように静かに生きている。一と時の のように静かに生きている。が、

秋耕やかやつりぐさを抜く仕事

私の家の近くに、少しの空地を利用私の家の近くに、少しの空地を利用して区が作った子供の遊び場がある。国の日は土埃が立って周囲の家が迷惑」というので草の種を蒔いた。秋になったらねこじゃらしとかやつりぐさがしている様子がよく分かった。「秋労している様子がよく分かった。「秋期」という季題も、実際は炎夏の草取耕」という季題も、実際は炎夏の草取りと同じだというのである。

ぼ れ 萩 ほとけ世 . 帯 の 書 割 に

作者のつくり出した「ほとけ世帯」という言葉がこの句の眼目である。仏という言葉がこの句の眼目である。仏は実体が完全に表現されてはいない。言葉だけ切り離したら何んのことか分からない。
付し、一句として読み下せば、ドラからない。

大したものである。

でくる。今回の一連は鎌倉で詠んだら

しい。鎌倉でこれだけの句が出来たら

蘆し **雀**ずめ 通 過電車をよろこべり

古風な言葉と難しい字を遣っているが、「ヨシキリ」「行々子」のことである。後の通過電車という味も素っ気もない言葉との対照が面白くしている。 五月のはじめ頃芦の生えている所にやって来てやかましく鳴き立てる、近くを突っ走る電車の音に消されるようなこでがある。風景は単調であっても五月頃の溌溂とした自然がよく表現されている。

昭和 53 年

余 後 0) 冬 、 柩 の 母 は 重 か り き

母を葬る一連の句の一つである。 本の歌に、母を負ぶってあまりに軽 木の歌に、母を負ぶってあまりに軽 をりげなく云いながら、」どんなに深 でものたか知れない。「重かりき」は、 をりげなく云いながら、」どんなに深 が悲しみを込めた言葉であるか。しば らくこの作者の作品を見なかったが、 やはり優れた表現の技倆を感じる。 やはり優れた表現の技倆を感じる。 の中の母はどんなに深 がましみを込めた言葉であるか。しば

ほろにがき花粉の味も花菜は

甘味辛味の他に苦味がある。蕗のとうが酒の肴やお茶漬によろこばれるのは苦味が有るからである。この句も花菜漬のほろにがさを讃えているのだが、それは「花粉の味」だと言っているが、それは「花粉の味」だと言っているが、それは「花粉の味」だと言っているが、それは「花粉の味」だと言っているが、それは「花粉の味」だと言っているが、それは「花粉の味」だと言っているが、それは「花粉の味」だと言ってある。

浪 人 の 子 が を り 春 0) 煤 払

私の子ども達も大学へはすんなり入れず、一浪も二浪もしていた。この句れず、一浪も二浪もしていた。この句をたことなどにこだわらず、春の煤払ちたことなどにこだわらず、春の煤払いるのであろう。

世は毎年の春「大掃除」というものがあって、役所から指示された日に、があって、役所から指示された日に、があって、役所から指示された日に、である。この句の煤払は自発的なものである。この句の煤払は自発的なものである。この句の煤払は自発的なものである。

であろうが。

手で植うる田植家族のいとほしや

何んでも器械化した農村では、昔のの心、田植はこのようでありたいとほしや」はこの人々のけなげな姿を見ての愛惜はこの人々のけなげな姿を見ての愛情はこの人々のけなげな姿を見ながらの姿を可がある。「いとほしや」

昭和 54 年

青田が囲む鮨屋も磯の匂ひして

農村でも鮨屋の暖簾が見られるのはというない。なまぐさいと言ったら句を関うすこともなく、鮨を喰べる客もを腐らすこともなく、鮨を喰べる客もも」は、田園の炎日を思わせるが、そむ」は、田園の炎日を思わせるが、それは磯の香がするというのは心をくぐれば磯の香がするというのは心にならない。

炎天の青 田 はむしろ暗いもの

87

赤とんぼ人の匂ひを慕ひくる

赤とんぼは、集団でやってくる。空の色も日の色も秋めいてからだが、それほど秋の深い頃ではない。人里離れた僻地よりも、山に囲まれていても、人家のかたまっている村のような所に多く現れる。東京の街中でも見ることがある。

性をよく云い得ている。人の肩に止り、たやすく人の指につまれるような、人なつこい赤とんぼのまれるような「人の匂ひを慕ひくる」は、

冬の蚊は錆びつく針で刺しにくる

歳時記には秋の蚊はあっても冬の蚊はないようである。ところが今年は私の住む砧でも、十二月になっても蚊が出てきた。寝ている耳元へ不意にブーと痛い筈だが、そんな感じは無い。それを此の句は、「錆びつく針」と云う。うるさいだけの冬の蚊をユーモラスに、しかも的確に表現している。

成人の日のしんぶんを眩しめり

成人の日を迎えた本人の感じであ

る。今日から社会人となり、大手を振っ

て歩けるが、また責任のようなものも

感じる。昨日まで何んでもなかった新

聞の活字が何んと眩しいことか。

持った清々しい若者である。 確かに善良な国民としての自覚を

昭和55年

温水プール女の重き身を浮かす

温水プールは冬の季語として差支えないと思う。夏の海辺の人混みの中なら、女性がどんな裸の姿体をさらけ出房した建物の中のプールで女性の若い肉体を見るとすれば、やはり衝動があるに違いない。「女の重き身を浮かす」は、なまなましく、しかも健康らしいは、なまなましく、しかも健康らしいは、なまなましく、しかも健康らしいは、なまなましく、しかも健康らしいは、なまなましく、しかも健康らしいは、なまなましく、しかも健康らしい

入 学 Ł + 九の背広 姿 な る

作者のお子さんは一年浪人しただけで、大学の医学部に入ったそうである。で、大学の医学部に入ったそうである。この句が入学の子の親とすれば、る。この句が入学の子の親とすれば、る。この句が入学の子の親とすれば、 ま朴に強く生きる親の尊い愛情がしみ こかと思われるのである。

田 風 Щ 0) 中 に も米どころ

山国には千枚田と云われるような、出国には千枚田と云われるような、と云われるほど良質の米が多く穫れるというのであった。快い青田風に吹かれながら、それを知った作者は心のやれながら、それを知った作者は心のやれながら、それを知った作者は心のやんは米どころの言葉がうれしかったのであろう。

沸 温 泉 は働く汗の匂ひして

す霊泉として大切にされている所が多い鉱泉を沸かすのであるが、病気を治「温泉」は「ゆ」と読ませる。冷た

の匂いが強いと作者は語っている。別の匂いが強いと作者は語っている。「働く汗炊の湯治を続けるのである。「働く汗炊の湯治を続けるのである。「働く汗炊の湯治を続けるのである。「働く汗炊の湯治を続けるのである。

棟 上げやかけやの 触 れ 鰯

自分の家が建つということは、人世の大いなる幸福である。家が大きい小る。其の日は大工、左官其の他の職人が集まってくるが、足場を組んで大工が集まってくるが、足場を組んで大工が作った柱を土台の上に建てるのは鳶職である。鳶が棟の上に立って揮うかけやが鰯雲に触れるという表現は爽やかで、これを仰ぎ見る建て主の心は喜びでいっぱいだ。

霜 紅 居 田 霧が 庭に なだれ込む

大枯 野空の青さを吸ひきって

下五の「吸ひきって」は、はじめ「吸いさっても真青に晴れた空は変わらないからである。空の青さを吸いきっていからである。空の青さを吸いきっていからである。空の青さを吸いきっても、吸いさっても真青に晴れた空は変わらないからである。空の青さを吸いきっても、吸いさってしまり返っていると言う方が大明るく静まり返っていると言う方が大いからである。空の青さを吸いきっても、吸いさってしば、はじめ「吸いさいからである。空の青さを吸いきってしば、はじめ「吸いされば、はいのである。

京壁のうし ろで鳴け り 雨 蛙

も、よく手入れの行届いた庭園と其処 も、よく手入れの行届いた庭園と其処 にある数寄屋風の構えが想像出来る。 京壁の色はくすんだ茶色である。其の は家の中にいるのだが、茂みの中にい る雨蛙の声は甲高く聞えるのである。

百日紅炎暑の空のつめたさに

でるすべりは、まったく夏中百日も とに的確な表現である。 とこったのは、まこさを「つめたさ」と言ったのはから覗く、 要一つない炎暑の空は秋晴の青空より 要一つない炎暑の空は秋晴の青空より

昭和 56 年

秋 深 し 溜 めては流す人と 車

私も環状八号線道路のほとりに住んでいるからこの句のような光景をいつでいるからこの句のような光景をいつ流す」の繰返しである。その繰返しの沖に秋は深まり、人間生活と自然の変中に秋は深まり、人間生活と自然の変化が見られるのである。

朝夕 の 暗 さに 馴れしとろろ汁

大も直ぐ暗くなる。その朝夕の暗さに 方も直ぐ暗くなる。その朝夕の暗さに られ、実直で勤勉なこの家の生活がよ られ、実直で勤勉なこの家の生活がよ く分る。うす闇にとろろを摺る音が聞

6

たまかなる女のくらし花八つ手

「たまか」という言葉はずい分久しく聞かないが、地味とかつつましやかことである。私の父や母から前の人がよく使っていた言葉である。八つ手の花の咲く頃はいく分寒さを感じさせる頃で、真白ではなく、クリーム色の清らかな花の姿は、たまかな女性を髣髴らかな花の姿は、たまかな女性を髣髴させる。

三ヶ日の親子蕎麦さへうしほ

ての句一つだけ離したら何んのこと か分らない。私は元日の能登を知って いる。曽々木の宿で雑煮を頂いた。大 ぶりな朱塗椀の底に豊かな丸餅が沈 が黒々と入ったその汁は澄んだうしほ が黒々と入ったその汁は澄んだっと

●● 三ヶ日の旅に親子が喰べた蕎麦がうし この雑煮を喰べた私には、能登の

く分かるのである。

門 燈 の 暗 きを春の灯と おもふ

この句を見たら「春燈のいま暗しと この句を見たら「春燈のいま暗しと に書かれていたと記憶している。充さ がこの句を知っていたら光陰集に投句がこの句を知っていたら光陰集に投句 がこの句を知っていたら光陰集に投句 あいだ。或は何番煎じか分からないの もあるということを加藤郁平氏が何か もあるということを加藤郁平氏が何か この句も存在価値があると思う。

郭公や野はなかなかに昏れきらず

郭公は同じほととぎす科で、ほとと ぎすと同じ頃に渡って来て同じよう た場所に棲んでいるらしいが、郭公の 方がほととぎすよりも低地の人家のあ るような所でもよく鳴くそうである。 れかけても、なかなか暗くならないの である。このような環境に育った人の 耳の底にはいつまでも郭公の声が残っ ていることであろう。

検 眼の椅子に 籾粒こぼれをり

る。有りのまま見たままの句である。 る。有りのまま見たままの句である。 とき、検眼の を乗せる がることである。 を乗せる がることである。 を乗せる がることである。 の収穫に働く農家の り真正面に据えて客 を乗せる がることである。

までも連想させようというのである。

蟻 0) 荷を 仔 細に見れば 稲の 花

誰でも子どもの頃から蟻が人間の喰

べ残しなどを巣へ運ぶのを見ている

が、この句のようにやがて米になる稲

の花であっても珍しいことだ。

て運ぶかどうかは知らないが稲の花を草や木の細かな花びらを蟻が餌としてオース・フェーリスの力

のわびしさも出ている。ろう。蟻の餌も少なくなった今の世へ運ぶとすればやはり驚きを感じるであ

寒 波 が 洗 Z 幟 は 合 羽 大 明 神

作者はお酉さまへお詣りするついでに、河童が祀られているというお寺を訪ねたのである。この冬の寒波が到来した日、風にはためく織には、河童が祀られたのである。この冬の寒波が到た。私もその謂われを前に聞いたことだあるが忘れた。作者には河童というおきえた。まことしやかな「かっぱ寺河童えた。まことしやかな「かっぱ寺河童えた。まことしやかな「かっぱ寺河童というがあるが忘れた。作者には河童というおきに冬の水」の句と二つ並ぶとよく分かる。

雛 あ 5 れ 雛 飾 5 ね ば 仏 壇

普通、雛あられはお雛さまに上げるものだが、この家は雛を飾っていない。 せのだが、この家は雛を飾っていない。 でいるのだが、この作者にとって、仏壇というものは一家の中心になっている。 供え物となればまず、仏壇によっているのだが、この作者にとって、仏でしまうのである。 この句も何か不思

109 昭和 58年

議なぼんやりしたものがある。

向き替へてばかり日本の稲刈機

コンバインのような器機はやはり口

シアのような広大な農地で働くもの

だ。狭い日本の田圃の稲刈では確かに

ことになる。

鼻につかえて向きを替えてばかりいる

仏壇の灰を均らして寒に堪ふ

私のことを云うと、若い時は仏壇なたが、家内に死なれてから毎朝拝むようになると線香を立てる灰が凍るように固まってしまうのである。よけいなことだが、この句のである。よけいなことだが、この句のく、一層「寒に堪ふ」の感じがするのく、一層「寒に堪ふ」の感じがするのであろう。

昭和 59 年

日の 沈む 真際 に来た り 初 稲 荷

年祭、初午である。この句の場合は正年祭、初午である。この句の場合は正月のはじめにお詣りする初観音、初不何か念願があって毎年のはじめにお話りするお稲荷さまだが、今年は夕日が沈む真際に来たということで俳句になったわけである。想像すると小さななが沈む真際に来たということで俳句になの沈んでゆくのが見られ、何か神秘的な感動を受けたのであろう。別に深いた句である。

げんげ田もコンクリートの畦の中

天然の立派な肥料になる紫雲英を咲

らがそうがしが日らコノフリート)まかせている田圃は美しい風景だ。とこ

はわびしい。田圃の畦塗というものはろがそのげんげ田もコンクリートの畦

がなければ出来ないらしい。近頃は面鍬先の働きがよほどの経験と修練の業

畦に変えてしまうようである。折角の倒な畦塗はやらずに、コンクリートの

紅雲棚引く風景も台無しである。

派手にして沈む色なり 花 蘇 枋

いかにも行く春の花という感じがす 四月を終わった頃、花蘇枋を見ると

る。赤とも紫とも云えないその色は派

手なのか地味なのか。 暗い感じではないが、明るい華やか

に惹かれむしろ憂愁を感じたものであ 俳句を作りはじめた頃この花の美しさ と作者に言わしめたのであろう。私も れるようなそんな思ひが「沈む色なり」 さでもなく、仄かな感傷に胸を緊めら

る。

本 に Ł 水 0) 缶 詰 秋 0) 風

きびしい残暑が去って、秋風に吹かまびしい残暑が去って、秋風に吹かまが、外国のようになった。日本の を、風と共に感じるのは水だ。世界一 がまかった日本の水が、外国のように がまで売られるようになった。世界一 が水になってしまったのである。

115 昭和

六○年代

暖流



'86

5

新 車 と は 獣 0) 匂 ひ 薄 暑 か な

車も自動車も俳句には野暮臭い言葉だが、新車と言えば悪くない。自由に 運転の出来る者にとって、欲しいと思う新車が自分の物になったときの悦び う新車が自分の物になったときの悦び さどんなか。作者が獣の匂いと言った その獣は何か。若者のような作者の感 覚をただ羨しく思う。機械には全然無 知な私でもこの句の面白さの分かるの は「薄暑」といふ季題があるからであ る。

119 昭和 60年

巴奈馬買ふ異国娘のかたことに

世別の 世別の、覚えたてのかたことの日本語 はて、遠いパナマから出張して来た異 はて、遠いパナマから出張して来た異 国娘の、覚えたてのかたことの日本語 に勧められて買ってしまったのであろ に勧められて買ってしまったのであろ があられて買ってしまったのである があられて買ってしまったのである。

ンドラを恐がる 妻と 雲の 峰

の動く乗り物には、生まれて一度も私のことを告白すると、私は遊園地

も知れないが、奥さんがゴンドラを恐ての句はケーブルカーのゴンドラか乗ったことがない。

がるのはよく分かる。一緒に乗ってい

あることの有難さを感じる。に、この一行の定型詩に季語の約束のに、この一行の定型詩に季語の約束のである。今更

長梅雨や牛の乳さへうすくなりぬ

続くと、ずい分長い梅雨だと思う。そ盆が過ぎてもまだ愚図ついた天気が

なったような気がする。無論そんなこのせいか、パン食に飲む牛乳さえ薄く

とはないが、「牛の乳」という古めか

しい言葉も愚痴っぽくなった自分を描

き出している。

寒肥や人の匂ひをつのらせて

今でも寒肥に人糞が用いられている今でも見られ、野壷に貯えられていた。ながに薄めたようなやさせて」という、水に薄めたようなやさせて」という、水に薄めたようなやさせて」という、水に薄めたようなやさしい言葉遣いで、寒肥の臭気を詠んだのである。

め が ね に も金属疲労寒の 明 け

るから不思議である。 眼鏡店を経営している作者の言葉と 眼鏡店を経営している作者の言葉と と思う。どんなに大切に扱っていても、と思う。どんなに大切に扱っていても、 と思う。どんなに大切に扱っていても、 して、「めがねにも金属疲労」は成程 して、「めがねにも金属疲労」は成程 して、「めがねにも金属疲労」は成程

やってくるということになっている。をり」という虚子の句がある。充さんしい。「大寒や見舞いにゆけば死んである。寒中の寒さに堪える疲労は恐ろある。寒中の寒さに堪える疲労は恐ろ

ちりんを見せ梅林のかるめ 焼

いきなり上五に「しちりんを見せ」と置いたのが巧い。梅林の茶店で昔ながらのかるめ焼をやっている。かるめ焼は大抵立ってやるものだから、柄の見える高さに置かれている。梅まつり見える高さに置かれている。梅まつりんぷんさせるのだが、炭火を使うかるめ焼には贅沢な古風さと、詩情が感じめ焼には贅沢な古風さと、詩情が感じれらる。

帰 小春日や「とっていいのは写真だけ」 り咲く水芭蕉あり小六月

作者が箱根で水芭蕉を見たのは、初り、湿地帯に生える植物が見られるより、湿地帯に生える植物が見られるより、湿地帯に生える植物が見られるより、湿地帯に生える植物が見られるよ

冬の小春日和というのだからまさに帰

126

暖流 189

分の俳句にした作者もしゃれた人であれた文句をそっくりそのまま借りて自何も言わなくても分かる。立札のしゃ次の句、「とっていいのは写真だけ」も、後は何も云わなくてもいいのである。まれたうれしさが出ているのだから、まれたうれる。「小六月」でお天気に恵り花である。「小六月」でお天気に恵

生きのこる歯に食いあてし柿の種

西い柿の種を噛んだときの痛みを詠んだ句だが、「生きのこる歯」という も、病気の歯などは早く抜いて立派な も、病気の歯などは早く抜いて立派な あった。今は生きている歯はなるべく あった。今は生きているという。眼鏡 できむ作者は、眼と同じに歯の大切 たを営む作者は、眼と同じに歯の大切

囀りの環がゆっくりと動きをり

ら人間が聴いても美しい。この句は、小鳥の囀りは雌を呼ぶ雄の恋唄だか

思ったが、やはり空を鳴き移る雲雀のはじめ何羽か集まった鳥の声のように

感じをよく把らえていると思った。

声と思い直した。「囀りの輪」はその



所収俳句季語索引(五十音順)	

梅	鰯雲	芋の葉	稲刈	青田	青き踏む	雨蛙	汗	足長蜂	秋深し	秋の風	あかとんぼ	青田風	青田	あ
15 • 125	95	63	110	29 • 44	19	98	94	31	100	115	88	44 • 93	86 • 87	
寒肥	寒明け	寒	枯野	刈麦	かやつりぐさ	雷	郭公	片陰	柿	帰り花	か	朧夜	炎天	襟巻
123	124	50 • 111	97	35	79	21	105	12	31 • 128	126		17	87	8
囀		<i>/</i> \	<u>/\</u>	子			ゖ゙	重	蜘	霧	*	寒	寒	
. 14	さ	小六月	小春日	供の日	こスモス	幟	げんげ田	五の峰	蜘蛛	49 1	木の根	寒風	寒波	寒蜆
129		126	126	62	65	74	113	121	22	96	18	67	108	38
暖房車	たまねぎ	種蒔き	筍	田植	た	蟬	節分	瀬音	成人の日	秋耕	獅子舞	しぐれ	三ケ日	百日紅
16	46	51	75	61 76 85		46	27	17	90	79	67	23	49 • 103	99

だと思う」と申された。然し、人生の大半を俳句を通して瀧先生 の批評鑑賞文だけはなおざりに出来なかった。 の恩情に支えられて来たことであり、先生から戴いた「山房一言」 るとき先生にお話すると「それでいい、私もそれが本当の生き方 くりに大変な時期があり、作句が疎かになることが夛かった。或 めておけばよい作品なのである。正直なところ私は生活の基礎づ この句集は編むべきか否か長い間迷った。ひとり胸の内におさ も貴重な文章なので、受賞作品と共に年代順に記すことにした。 昭和二十八年六月号より平成元年六月号の三十六年間、合計百句 にもこれだけは残して置きたいと考えた次第。正確には『暖流』 七月号(昭・五二)に「編集部抄出」として抜粋されている。私 城山を降って、裾野を突っ走る。 ………云々」 の名文など 『俳句』 である。また、その間に二年連続でいただいた「暖流賞推薦の言葉」 の句は当然ながら日常生活も詠って居るので、家族や肉親のため 先生は文筆にも優れており、集中例えば「逃げ水」の句評「赤

間お世話になったことへの感謝の気持を記すにとどめ、その他の えた。ここではそのことと、先生をはじめ『暖流』の皆様に長い 昨年は瀧春一先生の生誕百年に当り、私の俳歴は五十年をむか

句集の名は百句に因んで『百日紅』とした。

前後関係や略歴等はすべて後日に譲ることにした。

吾が家新築の折、庭木は総て兄から貰って比企丘陵の

秋にかけて美しい花を咲かせる。木肌のつるりとした姿から別称 生家から運んだが、そのなかに一本の百日紅があり、盛夏から初

「猿滑」とも書かれ、猿は私の干支でもある。

刊行にあたっては、佐藤喜孝さんに格別のご配慮を賜り、あら

ためて厚く御礼を申し上げたい。心からお礼を申し上げたい。

平成十四年 (二〇〇二) 六月吉日

金 井 充

著者住所・1940 - 0115 164 0011 340 0114 東京都中野区中央2の50の3 埼玉県幸手市東4の20の13 埼玉県幸手市中3の1の7 **3** 03 (3371) 4623 100二年七月一日 発行 俳句・評文集 発行所・HIRO制作室 0480 4 2 1 0 2 2 0480 4 2 3 3 9 2 製本·花岡製本所 発行者・佐藤喜孝 (カナイメガネ) 著者・金井 充 瀧春一 (霜紅居)